

## 水稻病害虫防除対策（8月）

### 1 いもち病（穂いもち）

- (1) 7月上旬調査では、県内の葉いもちの発生ほ場割合は平年より低い状況でしたが、各地から情報提供があり、病斑が多数認められる無防除ほ場や、ズリコミ症状を呈するほ場が確認されました（詳細は令和4年7月20日付け防除情報を参照）。7月中下旬調査では、葉いもちの発生ほ場割合は平年よりやや高く、発生程度の高いほ場もみられました。
- (2) 上位葉に葉いもちの病斑が認められるほ場では、早急に散布剤による防除を行ってください。
- (3) 散布剤による穂いもち防除を行う場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本として実施してください。多発するおそれがある場合には、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (4) 飼料用米など、育苗箱施用剤や粒剤を使用していないほ場では、葉いもちが発生し、近隣ほ場に感染するおそれがあるため、適切に防除を行ってください。
- (5) 使用薬剤及び注意事項については、水稻病害虫防除対策（7月）を参照してください。

### 2 紋枯病

- (1) 高温多湿が続くと上位葉鞘への伸展が激しくなり、葉枯れ、穂枯れによる減収のおそれがあります。また、茎が弱くなり、倒伏しやすくなります。
- (2) 多発の兆候がみられた場合は、穂揃期に2回目の茎葉散布を行ってください。
- (3) 使用薬剤及び注意事項については、水稻病害虫防除対策（7月）を参照してください。

### 3 ごま葉枯病

- (1) 砂質土壌水田等では、生育後半に肥料分が流亡し、肥料切れとなるため発生しやすくなります。深耕、堆きゅう肥の増施、客土、ケイカル等の施用等により地力の増進を図りましょう。
- (2) 常発地では、生育後期の肥料切れに注意し、カリ肥料の分施を行ってください。
- (3) 最高分けつ期頃から発病がみられ始め、穂ばらみ期頃から急激に進展します。出穂後は穂首や枝梗にも病斑を作りますが、穂いもちのように白穂になることはありません。多発すると上位葉が枯れあがり、穂枯れ症状となって籾の充実が悪くなり、茶米などを生じて減収の要因となります。
- (4) 穂枯れの発生が懸念される場合は、穂揃期と傾穂期に散布剤で防除を行ってください。

表1 ごま葉枯病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量	使用回数 の制限※
アミスターエイト	アゾキシストロビン	C 3	収穫14日前まで	1,000~1,500倍	3回以内
ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	3~4kg	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3~4kg	2回以内
	フサライド	I 1			
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フサライド	I 1			

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内）
- ・トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内）
- ・フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内

### 4 変色米

- (1) 腹黒米（アルタナリア菌）は玄米の腹側に黒褐色の病斑がみられ、夏期高温の年に発生が多くなります。
- (2) 紅変米（エピコッカム菌）は、玄米の表面に紅色の斑点を生じます。出穂後低温の年に発生が多くなります。
- (3) 褐色米（カーブラリア菌）は、玄米の表面が褐色に黒褐色の微斑点を生じます。高温、乾燥、強風などにより、抵抗力の低下したイネにみられます。
- (4) 適切な施肥を行い、早期に枯れあがる管理は行わないでください。また、収穫後は速やかに乾燥・調製を行ってください。

表2 変色米の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布量	使用回数の制限 ※	対象		
						ナリア	アルタ	ツカム エピコ ラリア カーブ
ノンブラス 粉剤DL	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内			○
	フェリムゾン	U14						
ノンブラス フロアブル	トリシクラゾール	I 1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内			○
	フェリムゾン	U14						
ブラシン 粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内		○	○
	フサライド	I 1						
ブラシン フロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	○	○	○
	フサライド	I 1						

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内）
- ・フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内

### 5 斑点米カメムシ類

- (1) 7月下旬の本田すくい取り調査では、発生地点割合は平年並でしたが、天候予報（仙台管区气象台7月28日発表）によると、向こう1か月の気温は高いと予想されているため、活動が活発になり、被害が大きくなるおそれがあります（詳細は令和4年8月3日付け防除情報を参照してください）。
- (2) 本田すくい取り調査では、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメが、畦畔雑草では3種に加えて県南、浜通りでクモヘリカメムシが捕獲されました。
- (3) 斑点米カメムシ類は、カスミカメ類は卵で、ホソハリカメムシやクモヘリカメムシ等の大型カメムシ類は周辺の樹上や落ち葉、土手や畦畔の雑草などで、成虫態で越冬しています。越冬後は水田周辺の雑草に移動してくるため、早期に除草を行うことで斑点米カメムシ類の生息数を減らすことができます。
- (4) 畦畔雑草での斑点米カメムシ類の生息数を減らすことで、出穂後の水田内への侵入数を少なくすることができますため、除草を励行してください。ただし、出穂直前に除草を行うと、かえって斑点米カメムシ類を水田内に追い込んでしまいますので、出穂10日前までに完了してください。

#### 【出穂期以降の対策】

- (1) 斑点米カメムシ類は、イネが出穂すると水田に侵入するため、出穂時期の早い水田に被害が集中します。早生品種や移植時期が周囲と比べて早かった場合は、斑点米カメムシ類の侵入・発生に注意し、出穂期以降に水田内で発生がみられる場合は、薬剤による防除を行きましょう。薬剤防除の目安は、乳熟期（出穂期の7～10日後）の水田内すくい取り（20回振り）で2～4頭です。
- (2) 散布剤による防除は乳熟期（出穂7～10日後頃）を基本とし、その後も発生がみられる場合は7日後に追加防除を行きましょう。ただし、**クモヘリカメムシを対象として防除を行う場合は、出穂期～穂揃期（出穂4日後頃）に1回目の散布を行ってください。**
- (3) 水面施用剤を使用する場合は、穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、7日以上止水してください。その後多発が予想される場合は、散布剤による追加防除を行ってください。
- (4) クモヘリカメムシ等の大型カメムシ類には水面施用剤の効果が劣る場合があるため、液剤や粉剤を使用してください。

表3 斑点米カメムシ類の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量 (散布液量)	使用回数の制限※
粉 剤	アルバリン粉剤DL	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	3 kg	3回以内
	キラップ粉剤DL	エチプロール	2 B	収穫14日前まで	3～4 kg	2回以内
	スタークル粉剤DL	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	3 kg	3回以内
	スミチオン粉剤3 DL	ME P	1 B	収穫21日前まで	3～4 kg	2回以内（但し、 出穂前は1回）
	ダントツ粉剤DL	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	3～4 kg	3回以内
	MR. ジョーカー粉剤 DL	シラフルオフエン	3 A	収穫7日前まで	3～4 kg	2回以内
液 剤・乳 剤・フ ロアブル 剤	エクシードフロアブル	スルホキサフロル	4 C	収穫7日前まで	2,000倍	3回以内
	キラップフロアブル	エチプロール	2 B	収穫14日前まで	1,000～2,000倍	2回以内
	スタークル液剤10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
	スミチオン乳剤	ME P	1 B	収穫21日前まで	1,000倍	2回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	5,000倍	3回以内
水 面 施 用 剤	アルバリン粒剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	3 kg	3回以内
	キラップ粒剤	エチプロール	2 B	収穫14日前まで	3 kg	2回以内
	スタークル粒剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	3 kg	3回以内
	ダントツ粒剤	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	3～4 kg	3回以内
無 人 航 空 機 に よ る 散 布	エクシードフロアブル	スルホキサフロル	4 C	収穫7日前まで	16倍 (0.8L)	3回以内
	キラップフロアブル	エチプロール	2 B	収穫14日前まで	8～16倍 (0.8L)	2回以内
	スタークル液剤10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	8倍 (0.8L)	3回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	24倍 (0.8L)	3回以内
	トレボンエア－	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	8倍 (0.8L)	3回以内
	MR. ジョーカーEW	シラフルオフエン	3 A	収穫14日前まで	16倍 (0.8L)	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用するには成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・ジノテフランを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱への処理及び側条施用は合計1回以内、本田での散布、空中散布、無人航空機散布は合計3回以内）
- ・エチプロールを含む農薬の総使用回数：2回以内（但し、は種時（直播）又は移植時までの処理は1回以内）
- ・ME Pを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内）
- ・クロチアニジンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、直播では種時または移植時までの処理は1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内）
- ・シラフルオフエンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・スルホキサフロルを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数：3回以内

## 6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

- (1) 第2世代幼虫は7月中旬ごろに発蛾最盛期となり、イネに産卵します。第2世代幼虫は8月上旬から9月にイネの葉を綴って「ツト」を作り、その中で蛹になります。
- (2) 発生が多いとは場内の多くの止葉にツトを作るため、穂の充実が悪くなり、品質も低下します。
- (3) 遅く移植したほ場や、直播栽培など8月中旬以降に出穂するほ場では、被害が大きくなります。また、窒素肥料を多く施用するなど、葉色の濃いほ場でも被害が大きくなりやすくなります。
- (4) 防除は、幼虫がまだ小さい8月上～中旬に行ってください。中齢幼虫以降はツトが大きくなり、薬剤がかかりづらくなるため、防除効果が低下します。

表4 イネツトムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1 B	収穫21日前まで	1,000倍	2回以内
MR. ジョーカー粉剤DL	シラフルオフエン	3 A	収穫7日前まで	4kg	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内）
- ・シラフルオフエンを含む農薬の総使用回数：2回以内

## 7 ニカメイチュウ

- (1) 第2世代成虫は、7月6半旬～8月1半旬頃に発蛾最盛期となります。
- (2) 第2世代幼虫の被害は出穂後に白穂となるため、被害が大きいと収量に影響します。
- (3) 薬剤による防除は、散布剤の場合には発蛾最盛期の7日後までに株元にもよく付着するように散布してください。水面施用剤の場合は、発蛾最盛期に湛水状態で施用し、7日以上止水してください。

表5 ニカメイチュウの防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	使用回数の制限※
水面 施用剤	パダン粒剤4	カルタップ	14	収穫30日前まで	3～4kg	6回以内
散布剤	スミチオン粉剤3 DL	MEP	1 B	収穫21日前まで	3～4kg	2回以内（但し、 出穂前は1回）
	スミチオン乳剤	MEP	1 B	収穫21日前まで	800～1,000倍	2回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・カルタップを含む農薬の総使用回数：6回以内（但し、浸種前は1回以内、浸種後から直播での種時又は移植時までの処理は1回以内）
- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内）

## 8 セジロウンカ

- (1) 7月頃に成虫が本田に飛来し、飛来成虫からふ化した幼虫が7月下旬～8月上旬に発生盛期になります。
- (2) 出穂期に幼虫の発生が多いと、穂を吸汁加害するため褐変するほか、排泄物によって発生した「スス」で穂が汚れ、千粒重の減少や品質の低下をもたらします。
- (3) 薬剤防除の目安は、1株当たりの幼虫数が5～15頭です。

表6 セジロウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	使用回数 の制限※
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回

## 9 ツマグロヨコバイ

- (1) 本種は年4回発生しますが、出穂期から乳熟期に発生した幼虫による吸汁被害が収量に影響します。
- (2) 発生が多いと上位葉や穂を吸汁し、葉先が赤黄色に変わります。また、排泄物にすす病菌が発生し、植物体がすすで黒くなります。
- (3) 1株当たりの成虫と老齢幼虫数が10頭以上で5%の減収になるため、出穂期にこの密度以上の場合は、薬剤防除を行ってください。

表7 ツマグロヨコバイの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	使用回数の制限※
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内

※使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農薬登録情報提供システムホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください(記載中の登録内容は令和4年7月29日現在)。  
液剤、水和剤、乳剤、フロアブル剤は、10a当たり140~150L散布する。